

論文審査の結果の要旨

氏名：大 屋 聖 郎

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：二相性アナフィラキシーの特徴—救急外来における多施設前向き観察研究—

審査委員：（主 査） 教授 権 寧 博

（副 査） 教授 浅 井 聰 教授 森 岡 一 朗

教授 高 山 忠 輝

本論文は、二相性アナフィラキシーの救急外来における頻度および、その特徴を解析した臨床論文である。比較的頻度が低く、その臨床的特徴や診療の実態が十分に把握されていない二相性アナフィラキシーの本邦における臨床的特徴を明らかにすることを目的に研究を行っている。これまで、二相性アナフィラキシーの本邦における調査は、申請者らによって実施された後ろ向き研究であったが、本研究は本邦において初めて実施された前向き研究となる多施設研究である。本研究によって明らかとなった主な知見は、本邦における発症頻度が、アナフィラキシー全体の 6.3%であったこと、アナフィラキシーの治療に対するアドレナリンの使用と二相性アナフィラキシーの発症とに優位な相関が認められたこと、また、二相性アナフィラキシーの発症時期については、約半数がアナフィラキシー発症後 10 時間を越えていたことである。発症頻度については、海外のこれまでの検討で 4.1%~5.1%という調査結果があるが、本研究により概ね海外とくらべて発症率が同程度であることが明らかになった。本研究では、二相性アナフィラキシーの診断基準を NIAID/FAAN を用いているが、診断基準が統一すると海外も本邦とで概ね同程度の発症頻度になることがわかった。二相性アナフィラキシーの関連因子の解析を行った結果、アナフィラキシーの出現時の処置としてアドレナリンの使用の有無との関連が明らかにされた。アドレナリン使用が二相性反応の予防的効果を示している可能性があることを本研究は示している。一方、ステロイドとの関連については、本研究では関連性を見出していないことから、アドレナリンを使用した今後の予防策への検討につながる知見と考えられる。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

令和 3 年 2 月 17 日